【事前案内から一部抜粋】

第１８回　筑波大学附属小・中・高等学校
体育・保健体育科合同研究会

ベースボール型 －“状況を把握し、判断する力”を高める授業づくり －

筑波大学大塚地区にある附属小・中・高等学校では，大学を含めた「四校研」を教科別に組織しております。体育科・保健体育科では 2005（平成 17）年度より，共通する領域・種目を設定し「小・中・高の授業の一貫性」をテーマに合同研究会を開催してきました。開催を積み重ね，体育・保健体育授業における諸課題を幅広く取り上げ，内容や方法を検討する中で，児童生徒の理解度を深め，思考・判断や態度面を育む授業のあり方を探りたいと考えました。そして、10 回の開催を節目に，種目とは異なる視点での小中高のつながりをテーマに（「かかわりあい」「遊び心」など）授業研究活動を行ってきました。

しかしながら，2020（令和 2）年度は，新型コロナウイルス感染症拡大の影響で公開授業ができず，小中高それぞれが一年間，試行錯誤しながら実施した「コロナ禍での体育・保健体育科の実践」を報告しました。昨年度（2021）もオンラインでの開催となり，公開授業では取り上げることが難しい「水泳授業」をテーマに設定し，小中高での授業のあり方について考える機会としました。

本年度も未だ先が見通せない状況のため，オンラインでの開催といたします。テーマは，現在の児童生徒に馴染が薄くなり，教材として“難しい”と指摘されることが多い「ベースボール型」としました。小学校ではベースボール型の簡易ゲームを通して，中学校では更に簡易ゲームを発展させた中で，高校では本格的なソフトボールの実践を通して，“状況を把握し、判断する力”を高めることをねらいとした授業実践の成果と課題について報告します。学校体育におけるベースボール型の指導はどうあるべきか，様々な角度から情報交換をしたいと考えております。

お忙しい中とは存じますが，万障お繰り合わせの上，ご参会いただければ幸いです。

記

１．日時　　2023 年（令和 5 年）1 月 28 日(土)　14：00 開始，13：45 より Zoom 入室開始予定

２．主催　　筑波大学附属学校教育局，筑波大学大塚地区「四校研」体育・保健体育科

３．内容　　①はじめに（趣旨説明等）：14：00～14：10　　司会　征矢 範子（高等学校）

②各校より実践報告　　：14：10～15：00　　発表　山崎 和人（小学校）
川崎 修　（中学校）
松本 英樹（高等学校）

③質疑応答（検討会）　　：15：00～16：00　　進行　宮﨑 明世（大学）

４．参加費　　無料

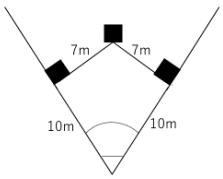
小学校高学年における残塁制ベースボール型ゲーム

－攻撃側の作戦に着目して－

筑波大学附属小学校　山崎　和人

１．はじめに

これまで、ベースボール型の実践の多くは、打つところを狙うことや、どこまで走るかといったところに焦点が当てられてゲームが行われてきた。そして、その多くの実践は、残塁なしのゲームで行われている。そのため、攻撃側の作戦を考える時に、作戦の広がりが見られないことが課題であると考えられる。そこで、ベースボール型の特徴を考えると残されたランナーをどう進塁させてホームに戻すかということや打順を考えることで、攻撃側の作戦のバリエーションが広がると考えられる。今回は攻撃側の作戦に焦点を当てて、実践を行った。単元は、鉄棒 15 分程度との組み合わせ単元で行い、ゲーム中心に６回行った。なお、バット操作等の打撃指導については、５年生の時に行った。



２．ゲームのルール

・１チーム５人。ランナーは残塁し、フォースプレーあり

・得点は、一塁１点、二塁２点、三塁３点、本塁４点とする。

(例、一塁で残塁しているランナーは以降の打者の打球で本塁まで帰れれば４点となる。ただし、以降の打者の打球で進塁できなければ１点のまま。)

･打者１巡で攻守交替(2 回の裏まで行う。)

・フライ、ライナーのダイレクトキャッチはアウト。タッチアップはなし。

･打球が内野ゾーンに返球されたらランナーは進塁を止める。(オーバーランしていた場合は戻る)

３．実践の成果

単元の前半では、打順を男子からやジャンケンで決めていたチームが多かったが、単元中盤からは、意図した打順を組むようになった。また、単元終盤にかけては打順が固定されているチームが多かった。以下は、子どものノートにおける記述である。

・打順を工夫することで点が入りやすくなると思いました。一番遠くに打つ人が４番や５番に、塁を進むことが得意な人は１番にしました。

・とにかく人をたくさん塁に出すことが大切だと思った。私は、１番なので１塁に行けるようにできるだけコートの左にボールを打つようにしています。

このように残塁制を取り入れることによって、より多くの得点するために、ランナーの有無によって打つ方向を変えたり、打順を工夫したりする様子が見られた。

中学校ベースボール型における“状況を把握し、判断する力を高める”授業

－中学校では何をどのように身に付けさせるか－

筑波大学附属中学校　川崎修

キーワード：男女共習(混合チーム)、守備者の役割行動、易しい投球を打ち返す

１．はじめに－中学校として－

生徒の小学校での学習経験は多種多様であり、各観点の習得レベルの差は大きい。また中学生は、運動・スポーツまたは体育が嫌いな生徒が多くなるといわれる。そのような状況での中学校体育では、各領域の学習のはじめに、その実態を確実に把握することが重要となる。それを踏まえつつ、中学校で求められる次の段階に全体を引き上げるためには、小学校での学びをどのように活かすのか、個々の差をどのように埋め合わせるのか、何をどのように確実に身に付けさせて高等学校につなげるのか等について、指導内容や方法を十分に検討しなければならない。今回は、中学校におけるベースボール型の授業実践を報告し、その学習成果や課題等から議論を広げ深めていきたい。

２．授業の概要

１）対象

第２学年　41(40)名×5 学級、男女ほぼ半数

２）単元計画（11 時間）

<table>
<tr><td>時</td><td>1</td><td>2</td><td>3</td><td>4</td><td>5</td><td>6</td><td>7</td><td>8</td><td>9</td><td>１０</td><td>１１</td></tr>
<tr><td>展</td><td colspan="2">はじめ</td><td colspan="3">なか１</td><td colspan="4">なか２</td><td colspan="2">おわり</td></tr>
<tr><td>分</td><td>オリ</td><td>基本技能</td><td>ルール理解</td><td>守備者の役割行動</td><td>打技能向上</td><td colspan="2">ルール理解</td><td colspan="2">役割行動と走塁判断</td><td colspan="2">パフォーマンス発揮</td></tr>
<tr><td>5</td><td rowspan="3">アンケート
調査</td><td rowspan="3">チーム
活動</td><td colspan="9">集合・整列・挨拶・健康観察、チーム活動(ランニング、準備運動、補強運動)</td></tr>
<tr><td>10</td><td colspan="3">キャッチボール</td><td colspan="6">キャッチボール＆バッティング</td></tr>
<tr><td>15</td></tr>
<tr><td>20</td><td rowspan="3">調査結果
種目特性</td><td rowspan="3">投捕</td><td rowspan="2">ルール
説明</td><td colspan="2">課題の確認</td><td rowspan="4">バッティング
ICT</td><td rowspan="2">ルール
説明</td><td colspan="2">課題の確認</td><td rowspan="4" colspan="2">対抗戦
（ゲームⅡ）</td></tr>
<tr><td>25</td><td rowspan="3">ゲームⅠ</td><td rowspan="3">チーム別
バッティング
＆
ゲーム練習</td><td rowspan="3">ゲームⅠ</td><td rowspan="2">チーム別
ゲーム練習</td></tr>
<tr><td>30</td><td rowspan="4">ゲームⅡ</td></tr>
<tr><td>35</td><td rowspan="3">調べ学習
ICT</td><td rowspan="3">バッティング</td></tr>
<tr><td>40</td></tr>
<tr><td>45</td></tr>
<tr><td>50</td><td colspan="10">振り返り・まとめ・挨拶</td></tr>
</table>

３）ゲームⅠ・Ⅱの概要

<table>
<tr><td></td><td>ゲームⅠ</td><td>ゲームⅡ</td></tr>
<tr><td>人数</td><td colspan="2">・1 チーム男女混合の 6～7 人(守備は 5 人、打者交代時にローテーション、待機は記録係).</td></tr>
<tr><td>コート</td><td colspan="2">・本塁角 60°、1・3 塁角 90°、2 塁角 120°. 本塁と 1・3 塁間 16m、1・3 塁と 2 塁間約 10m.
・ベース(塁)は、半径 2m の円(本塁のみ長方形).
・コートから 2m 離れた場所に、セーフティーラインを引く(競技者以外の生徒と用具は外側に).</td></tr>
<tr><td rowspan="2">攻撃</td><td colspan="2">・攻撃時は、必ず 2 塁走者を置き、2 塁走者は打撃後に本塁まで走塁する.
・2 塁走者が本塁に帰ることができれば 1 点.
・残塁はなし.</td></tr>
<tr><td>・打者走者は進塁した各塁ごとに得点.
例)2 塁到達で 2 点、3 塁到達で 3 点.</td><td>・進塁を阻止された場合は 0 点.
・前塁に戻れた場合は、その塁までの得点.</td></tr>
<tr><td rowspan="2">守備</td><td colspan="2">・得点阻止① 2 塁走者が戻るよりも早くボールを本塁に戻してアウトを取る（ブレイク).
・得点阻止② 打者走者の進塁より先の塁でアウトを取る（ストップ).</td></tr>
<tr><td>・必ず本塁でのブレイクを狙う.
・ブレイクに関与しないプレーヤーはブレイク完了までにストップを狙う塁に集合する(送球なし).</td><td>・ブレイクとストップの遂行や順序は、状況を判断してプレー選択できる.
・ストップも送球又は持ち込むことで成立する.</td></tr>
</table>

高校体育における球技「ベースボール型」の実践

― ソフトボールに関して・ソフトボールを通して、高校生に教えておきたいこと―

筑波大学附属高等学校　松本英樹

1．はじめに

本校体育で履修できる球技種目をふり返ると、ゴール型（サッカーやバスケなど）が多く、3 年次の選択種目を含めるとネット型（バレーなど）も多くなる。ベースボール型は、「ルールが非常に複雑で、運動技能的にも戦術的にもプレイの課題性が高く、ゲームの本質的な面白さを保障しにくいことや、ゲームの中で個々の子どもがプレイに直接関与する学習機会が他のゲームに比較して少なく、さらに運動量の低さが問題」（2016、岩田）と指摘されるように、取り扱うのが難しい。本校では 3 年次の選択において一部の生徒が主体的に企画して学習するのみであった。しかし、教員の入れ替わりを機会に教科内で検討を重ね 2021 年度から 1 年生女子全員にソフトボールを履修させることにした。全 14 回の授業の中で、“どの部分にこだわり、どのように教えるのか”の試行錯誤は 2 年目となる。

2．授業の流れ

回	テーマ	内容	回	テーマ	内容
1	授業オリエンテーション 「野球あそび」	授業の基本＋アンケート 復習）投げる・捕る・打つ	8	ミニゲーム ルールの理解④	T打ち・残塁あり チーム得点と個人成績
2	ゲームの中で投げる・捕る	ポジションを覚える アウトを取る投げ方	9	映像で学ぶ〔座学〕	ルールの復習 ソフトや野球の知識
3	投げる・捕る、練習 ルールの理解①	キャッチボール 野球場の基本	10	９人制の確認ゲーム	投手あり・T打ち・早歩き チーム編成（選手登録）
4	ゲームの中で打つ	ボールカウントを理解する 体勢を崩さない振り方	11	９人制の確認ゲーム	投手あり・T打ち・早歩き チーム練習
5	打つ、練習 ルールの理解②	8ヶ所で、打つ練習 フェアとファール	12	ゲーム （守備時に状況把握を意識する）	投手あり・T打ち・走る 記録
6	ゲームの中で走る	ベースの回り方を理解する T打ち・先の塁へ投げる	13	ゲーム （守備時の状況把握を意識する）	投手あり・T打ち・走る 記録、課題とアンケート
7	ミニゲーム ルールの理解③	T打ち・残塁あり フォースの状態を理解する	14	〔予備日〕※雨天で前半に1回	小アリーナで体つくり運動 三冠王や日本シリーズ解説など

1・2 組と 5・6 組は 10/18～11/18、3・4 組は 11/21～1/20 で実施

「フォースの状態を理解する」ことで、守備側には“タッチプレー”が、攻撃側には“進塁しない”という選択肢が生まれる。基礎的な捕る・投げるの技術不足は多々感じるが、ゲームの中で“状況を把握し、適切な判断をしている”場面も多くみることができた。

研究会では、授業の映像やアンケート結果、工夫した点などについて共有させていただきます。校種を越えてご意見をいただき、次年度への課題を明らかにしたいと思います。

【報告書】令和４年度の取り組みを終えて

１．小学校

発表題目 ： 小学校高学年における残塁制ベースボール型ゲーム
－攻撃側の作戦に注目して－

担当教員 ： 山崎和人

２．発表内容（スライドの主な流れ）

・小学校における体育授業並びにベースボール型授業の課題
・学習指導要領解説の記載と本実践のねらい
・本実践の単元計画（３０分×６回）と授業の流れ
・指導の際に使用した教具
・ゲームのルール、コートの大きさ
・授業の様子（ゲームの様子：映像）
・授業の成果①（映像、児童の記述）
・授業の成果②（単元前半と後半のゲームパフォーマンスの変化など：映像、児童の記述）
・まとめ（本実践全体の成果）

3. まとめ（検討会での内容を含めて）

これまで、ベースボール型の実践の多くは、打つところを狙うことや、どこまで走るかといったところに焦点が当てられてゲームが行われてきた。そして、その多くの実践は、残塁なしのゲームで行われている。そのため、攻撃側の作戦を考える時に、作戦の広がりが見られないことが課題であると考えられる。そこで、ベースボール型の特徴を考えると残されたランナーをどう進塁させてホームに戻すかということや打順を考えることで、攻撃側の作戦のバリエーションが広がると考えられる。今回は攻撃側の作戦に焦点を当てて、実践を行った。本実践で得られた成果(○)と課題(▲)は下のとおりである。

○単元の前半では、打順を男子からやジャンケンで決めていたチームが多かったが、単元中盤からは、意図した打順を組むようになった。また、単元終盤にかけては打順が固定されているチームが多かった。

○残塁制を取り入れることによって、より多くの得点するために、ランナーの有無によって打つ方向を変えたり、打順を工夫したりする様子が見られた。

▲本実践を同様の時間で実践するためには、事前にバット操作や簡単なベースボール型ゲームを行いゲームのルールを理解しておく必要がある。本校では、各教材における系統が計画的に積み重ねられており、３年間にわたって指導者が代わらないことから見通しをもって指導することができる。今回の６年生は、５年生の時にバット操作を十分に行ったことやキックベースでの経験があったため、スムーズにルールを理解してゲームを行うことができた。

当日はＩＣＴの使用の有無、児童の既習、バット操作の指導、対話について教師が意識していること、ルールの工夫等に関する質問や意見を頂戴することができた。これらを参考にしながら、今一度系統について見直していき実践を積み重ねていく。

【報告書】令和４年度の取り組みを終えて

１．中学校

発表題目 ： 中学校ベースボール型における“状況を把握し、判断する力を高める”授業
－中学校では何をどのように身に付けさせるか－

担当教員 ： 川崎修

２．発表内容（スライドの主な流れ）

・中学校における体育授業並びにベースボール型授業の課題
・学習指導要領解説の記載と本実践のねらい－中学校と高等学校のつながり－
・本実践の単元計画（11 時間）と目標
・指導するにあたって重視したこと
・環境設定（コート、人数)、ゲームのルール、用具、学習資料及び ICT の活用
・授業の様子（単元全体の学習活動：映像）
・授業の成果①（単元前半と後半のバッティングパフォーマンスの変化：映像、生徒の記述）
・ゲームのパフォーマンスを向上させるための指導ポイント（教師の観察行動と相互作用行動）
・授業の成果②（単元前半と後半のゲームパフォーマンスの変化など：映像、生徒の記述）
・授業の成果③（アンケート調査による単元前と後の変化：数値、生徒の記述）
・まとめ（本実践全体の成果と課題）

3. まとめ（検討会での内容を含めて）

中学校の体育授業におけるベースボール型の授業で、何をどのように学ぶことが学習者にとって価値あるものになるのか。本実践では、“状況を把握し、判断する力”をテーマにゲームのルールや学習の方法を検討し、ゲームを通じて理解を深めさせるとともに思考・判断することでパフォーマンスを向上させることをねらいとした。本実践で得られた成果(○)と課題(▲)は下のとおりである。

○守備者の役割行動に焦点をあてたゲームのルールにしたことで、守備時における“状況を把握し、判断する力”が高まったとみられるゲームパフォーマンスを確認できた。また、ベースカバーやバックアップ、中継プレーについての知識や思考については、単元後の調査やテストの結果から多くの生徒が理解していたことを確認できた。

○中学校におけるベースボール型の授業では、運動経験や発育発達、性別などによる知識や技能の差があっても、チームの編成やゲームのルール及び学習過程を工夫することによって、“状況を把握し、判断する力”を高める学習ができると考えられた。

▲高校でのよりよい学びにつなげるためには、中学校においてさらにパフォーマンスを向上させておくことが必要だと考えられる。特に、守備時における個人戦術や集団戦術の学習と習得は重要だと考えられ、個々人の理解や技能の向上を促進させるための指導方略や指導技術を引き続き検討していかなければならない。

当日は全国から多くの方にご参加いただくことができた。また、研究会後には、複数の参加者から問い合わせいただき、新たな教具の開発やルールの工夫等に関する情報や意見を頂戴することができた。今回の成果や課題から引き続き研究を進めていく。

【報告書】令和４年度の取り組みを終えて

１．高等学校

発表題目 ： 高校体育における球技「ベースボール型」の実践
－ソフトボールに関して・ソフトボールを通して、高校生に教えておきたいこと－

担当教員 ： 松本英樹

２．発表内容（スライドの主な流れ）

・附属高校の体育年間計画
・全 14 回のソフトボール授業の流れと目的、使用した用具
・１回目の授業を紹介「野球遊びの中で、ソフトボールの基本（投・捕・打）を確認する」
・教室での授業を紹介「実践的に学んできたことを映像で確認する・文化面についても学ぶ」
・７回目の授業を紹介「状況把握と判断力を必要とするルール…“フォースの状態”を理解する」
・最終的なゲームの形（場の準備、基本的なルール、試合に向けた意識の高め方など）
・授業中の動画（5 分）
・授業アンケートの結果（ソフトボールへの好意度、知識や技術に対する自信度の変化など）
・生徒の感想（生徒の感想から本授業の特徴を考える）

3. まとめ（検討会での内容を含めて）

高校１年生の女子全員にソフトボールを履修させるようになって２年目を終えた。ベースボール型に馴染が薄くなってきている“この頃”の生徒たちに、ソフトボールの“どの部分にこだわり、どのように教えるのか”の試行錯誤はまだまだ続くが、本授業の主な成果と今後の課題を以下にまとめる。

〇守備に重きを置き、“フォースのルール”を理解させることにこだわった。生徒たちは声を掛け合いながら、ピッチャーが投げる前に“状況を把握し”、ランナーをどこでアウトにすべきか“より良い判断をしている”場面を多く観察することができた。

〇本授業を終えて、生徒たちはソフトボールを「好き」と捉えるようになった。それは、基本的な知識や技術が高まったことにもよるが、生徒同士で「コミュニケーションを取り合いながら、チームプレーをする楽しさを味わえたこと」が大きな理由となっていた。

▲「棒立ち」の姿勢で守る生徒が多く見られた。キャッチボールから姿勢にこだわり、守備範囲を広げる練習を加えていく必要がある。また、ライトがファーストのカバーをするなど、1 球ずつボールを追う動き（連動した動き）を重視して、ゲームの中で運動量を増やす工夫が望まれる。

▲授業内では「チームで LINE グループを作って相談している」などの事例があった。1 人 1 台端末に効果的な情報を流すなど、ICT の活用についても検討していきたい。

ソフトボールに関して・ソフトボールを通して、教えておきたいことは、これからも増えていく。生徒観察と教材研究を重ねたい。合同研究会では、校種を越えて、参加者の皆様から貴重なご意見をいただきました。ありがとうございました。

本年度の授業実践については、本校の研究紀要（第 64 巻）にまとめています。ご覧ください。

https://tsukuba.repo.nii.ac.jp/search?search_type=2&q=1678346951268